

# 座 談 会

～ 東日本大震災の支援活動に参加して ～

- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| ① 救出活動（宮城県内）<br>消防局警防部警防課救助係長                  | 平成 23 年 3 月 14 日～3 月 21 日<br>中 禮 康 久 |
| ② 医療（仙台市、茨城県高萩市、北茨城市）<br>病院局八幡病院副院長            | 平成 23 年 3 月 12 日～3 月 22 日<br>伊 藤 重 彦 |
| ③ 放射線対応（福島県内）<br>保健福祉局地域医療課主任                  | 平成 23 年 7 月 4 日～7 月 9 日<br>浅 野 玲 子   |
| ④ 給水活動（福島県いわき市）<br>水道局西部工事事務所工務担当係長            | 平成 23 年 3 月 29 日～4 月 5 日<br>工 藤 邦 紀  |
| ⑤ 健康相談・心のケア（釜石市）<br>若松区保健福祉課地域保健係長             | 平成 23 年 3 月 14 日～3 月 18 日<br>三 角 順 美 |
| ⑥ 避難所運営（釜石市）<br>産業経済局緊急経済・雇用対策室次長              | 平成 23 年 7 月 8 日～7 月 16 日<br>春 日 伸 一  |
| ⑦ 行政事務支援（釜石市）<br>小倉南区総務企画課<br>(小倉南区選挙管理委員会事務局) | 平成 23 年 8 月 31 日～9 月 14 日<br>松 下 悦 子 |
| ⑧ 危機管理（釜石市）<br>消防局危機管理課調整係長                    | 平成 23 年 5 月 3 日～5 月 11 日<br>田 中 直 樹  |

## 震災支援本部

東日本大震災支援対策担当理事  
東日本大震災支援対策担当課長

高 原 義 弘  
上 村 鋭 治 (司会)

## 東日本大震災の支援活動に参加して～座談会～

**上村（司会）：**

まず始めに担当理事の高原よりごあいさつ申し上げます。



**（高原理事）**

**高原理事：**

本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。昨年3月11日に発災いたしました東日本大震災から間もなく1年を迎えようとしています。

マグニチュード9.0という日本における観測史上最大の地震と津波、そして、原発事故。この模様は全世界に繰り返し映像が流されました。この震災による死者と行方不明が約2万人、被害額は16兆円以上。文字通り戦後最大、最悪の災害であったわけです。国民として、公務員として、自治体として、何ができるのかということをお問自答したのは皆さん同じだろうと思います。

発災直後は国の要請で東北の各地、それから4月下旬以降はともに世界遺産を目指す製鉄の町ということで釜石市へ主に職員を派遣してきました。8月には釜石市に北九州市・釜石デスクを設置し、現地のニーズを細かく把握すると同時に、ものづくりや環境など、いわゆる北九州らしい、北九州の強みを活かした支援を進めています。12月には申請のお手伝いをしました釜石市が、環境未来都市にも選定されています。

2月10日に復興庁が設置され、本格的に復興事業が開始されました。本市は釜石市へ現在、区画整理等7名の職員を派遣しており、引き続き24年度も派遣を続けることにしております。

本日、お集まりの皆さんはそれぞれの分野で東日本大震災の支援活動に参加された方々です。被災地での献身的な皆さんの活動に対して敬意を表したいと思います。また、皆さんの活動が被災者の救援、さらには被災地の復旧・復興に大いに貢献していると私も同じ職員として誇りに感じております。

今回、お集まりいただいたのは、皆さんのご苦労や努力の跡をしっかりと記録として残す、そして、今後の支援活動や、将来、本市での災害発生時の参考にすることを目的にしております。まったく前例とか、マニュアルのない中で、皆さん、それぞれの分野で非常にご苦労されたと思います。必ず、教訓や将来に向けての提言などがあると思います。貴重な体験、ご意見をお聞かせいただければと思います。



## ——発災直後の被災地の様子——

### 上村（司会）

それでは、ただいまから座談会に入ります。

まず、昨年3月11日に地震が発生し、本市でも津波注意報が発令されました。このような中、まず、最初の派遣となった消防局の皆さんですが、現地の様子などを含めてお話しください。

### 中禮：

消防局警防課の中禮です。私たちは3月14日から21日までの8日間、福岡県の緊急消防援助隊として宮城県亶理郡山元町に派遣されました。北九州から1,700kmの距離を陸路で移動しました。消防局の航空隊も発災当日の23時45分に、消防庁長官からの出動指示で、12日明け方に航空部隊の集結場所である福島空港に向かうよう第一報が入り、航空隊は翌朝6時に、日の出とともに航空隊員8名がすぐに現地へ向かいました。



（中禮康久さん）

テレビ等の映像で被災地の状況が刻一刻と伝わってくる中、同時進行で陸上部隊も全国から集まり、関西から中国地方まで派遣隊の範囲が広がっていました。その間、九州にも派遣要請が来るのかどうかは半信半疑で、でも、早く救助しなければならない状況でしたので、私たちの気持ちとしては早く要請があればという思いでした。そう思っているところ、14日の12時に消防庁長官の出動指示により、福岡県隊を含めた九州各県隊が派遣となりました。出動指示があったものの、派遣先が決定していなかったことから「とりあえず関東地方を目指せ！」というものでした。

被災地まで1,700kmの長距離の移動となったため、途中、岡山県の総合体育館、静岡市の消防学校、栃木県の消防学校を宿营地として3泊した後、17日の正午ごろ、現地に到着しました。

被災前の山元町は、町の沿岸部は長い砂浜が続き、その後背地は海拔が低く、住宅や田んぼ、或いはイチゴ畑が広がっていました。また、仙台市から南に約30km、福島第一原子力発電所から約55kmの位置で、福島県と隣接した所です。

そこで初めて見た光景は360度全てが流された状態で、言葉がなかなか出ませんでした。果たして、こういう現場で自分たちの救助活動ができるのか、どのように救助活動を進めていったらよいのかなど、色々な不安がありました。

到着した時には地震発生から6日間経過していたのと、海岸線と並行する土手のような国道6号線を境に見渡す限り、押し流された家や車、水没した田園、瓦礫の山など、現場は想像を絶するものであり、このような状況では生存者の可能性は低いとの思いがありました。しかし、私たちの任務である一人でも多くの生存者を必ず発見するという強い意思を持って活動にあたりました。活動範囲は、東西1km、南北2kmの地域を担当し、積み重なった瓦礫の山や流れて押しつぶされた車などに入り、行方不明者の捜索活動を実施しました。活動中は、余震が何度もあり、津波警戒のため活動を一旦中止しなければならず、活動が思うように進みませんでした。

最終的に生存者を発見することはできませんでしたが、12名のご遺体を発見してご家族のもとにお返しすることができたことや、現地消防本部の救急活動などに従事できたことなどによって、被災地に対し微力ながら力になったのではないかと感じられ、このような被災地での貢献の仕方もあるということを確認しました。

以上です。

## ——震災直後の医療体制——

### 上村（司会）：

ありがとうございました。続きまして、医師の災害派遣につきましては、阪神大震災を機に国レベルで DMAT という体制が作られたと伺っております。震災直後の医療体制などについて、八幡病院の伊藤副院長お願いいたします。



（伊藤重彦さん）

### 伊藤：

私は厚労省管轄の日本 DMAT 隊員であり、北九州地域の統括 DMAT 登録者です。震災直後に、厚労省から日本 DMAT に出動命令が出され、八幡病院から DMAT1 チーム 5 名が 12 日の午前 7 時に福岡空港から自衛隊機で宮城県仙台市の自衛隊基地に向かいました。このチームは自衛隊基地に運ばれて来る重症の傷病者を福岡空港まで航空機搬送するのが役割でしたが、実際には、福岡まで搬送するような傷病者はいませんでした。そのため、13 日の夕方には九州から出動した DMAT は撤退が決まり、14 日には病院へ帰って来ました。

3 月 15 日、日本医師会が JMAT という医療派遣チームを出動させると発表しました。16 日には九州 JMAT の派遣先が茨城県に決まりました。私は、被災県の災害対策本部と直接連絡を取りながら、できるだけ早期の出動準備に掛かりました。被災地情報は混乱しており、福岡県医師会と茨城県医師会とは連絡が取れにくい状況でした。北九州市医師会の理事会では、16 日時点で派遣に GO サインが出ましたが、原発事故も重なっていたので、職員管理という観点から、私たちの出動に関する病院局の結論はなかなか出ませんでした。福岡県医師会から出動許可がでた 18 日には、八幡病院のドクターカーと小倉医師会の検診車を被災地内での移動用車両として東京までフェリーで送りました。八幡病院 DMAT5 名、北九州総合病院 DMAT3 名、北九州市医師会の医師 3 名あわせた総勢 13 名の JMAT チームは、福岡県のトップバッターとして 20 日朝一番の飛行機で羽田まで飛んで、その後、移動用車両で常磐自動車道から茨城県に入りました。

情報収集のため最初に高萩市の災害拠点病院に行きました。ところが、拠点病院責任者から「ここじゃなくて、いわき市に行ってくれ」と言われました。高萩市避難所の医療支援が目的でしたが、福岡県で入手した情報とは明らかに異なっていました、突然予定を変更するのは同行している医師会の先生を危険にさらすことにもなるので、自分たちの手できちんと現状調査し、この地域で支援を行う

方針としました。高萩市の災害対策本部である市庁舎は地震で壊れ、本部は近くの体育館に移っていました。副市長さんから被災状況をお聞きして、さらに消防機関とも情報交換を行い、その日は午後いっぱいかけて、2カ所の避難所を回りました。

翌日 22 日は、いわき市近くの北茨城市に向かいました。この地域は地震被害とともに津波の被害をかなり受けており、避難所が 10 カ所くらいに分散しているので、応援してほしいということでした。すでに支援に入っていた筑波大学の医療チームと協議し、私たちは 5 カ所を担当しました。点在する避難所はナビを使いながら車で移動しました。避難所では、病院に行けないで薬が切れている、避難生活でけがをした、あるいは呼吸器感染にかかっている人たちの診療を行いました。

高萩市、北茨城市の避難所はライフラインのうち電気だけが通っていました。お年寄りが中心の避難所は地元住民の方がほとんどで、お子さんの多くはすでに自宅に連れて帰られていました。福島原発から東京の方に避難される途中の避難所では、若いお子さん連れの家族が目立ちました。3 日間で、110 名ぐらいに薬を処方し、治療しました。災害カルテに診療情報を残し、行政に渡しました。避難所生活は大変なはずなのに、北九州から支援に来た私たちに、ありがとうと感謝されました。

地震や津波による広域災害では、自己完結型医療支援が鉄則です。原発事故で物流が停止したなかでのガソリン不足の状況、高速道路の交通規制カ所など事前調査が必要です。事前に警察の緊急車両の許可等も取っており、移動車両も自分たちで用意しました。私たち DMAT は普段から訓練を受けていますが、医師会の先生がたにとって、被災地に負担を掛けないルールもきちんと知って頂く良い機会になったのではないかと考えています。以上です。

## ——放射線・放射能への対応——

### 上村（司会）：

ありがとうございました。それでは続きまして、今回、福島第一原発の事故が、地震、津波に加え大きな問題となっています。一般的にはなじみの薄い放射能ですが、その対応で現地に入られた浅野さんにお話をいただきます。

### 浅野：

保健福祉局地域医療課の浅野です。私は診療放射線技師で、今回の派遣に当たっては国からの依頼に基づいて、避難住民、主に福島県内の住民の方々と、避難区域から避難されている方が一時立ち入りから戻って来られた時の被ばく量の測定、さらには、もし汚染していたらその除染、そして、健康チェックという業務で派遣されました

私たちは 2 回の派遣があり、第 1 陣は発災直後に避難所に入る方々への被ばく量の測定を、第 2 陣は先ほど言いました一時帰宅がされた方々が戻ってくる時の測定です。第 1 陣は 3 月末、第 2 陣は 6 月、



（浅野玲子さん）

7月だったのですが、私は第2陣で派遣されました。

一時帰宅というのは、避難区域から避難している方々が2時間ぐらいだけ自宅に戻って良いというものです。真っ白な防護服を着て、暑さ対策をした上で、自宅に戻り、家から大きなビニール袋1つ分の荷物だけを持って帰れることになっていました。その持ってきた荷物を全部測定するのも私たちの作業でした。

一時帰宅の流れですが、避難区域の外にある集合場所に住民の方々が集まり、そこから東電の職員、DMAT、私たちのような自治体の放射線技師、大学の放射線の専門家、自衛隊の方々などが揃って、それぞれの役割をやるようにシミュレーションができていました。私たちは、出発前の住民の方々の健康チェックを行いました。住民の方々はその日しか家に帰れないので、無理してでも来ているのですが、6月、7月でも暑くて、熱中症になりかけた方々もいました。そういう人には無理して行かなくてもとお伝えしたり、DMATの先生方にご報告して、「こういう方もいらっしゃるので気を付けてください」というような健康チェックをさせていただきました。

戻って来たら、皆さん防護服のまま体育館に入って来るので、汚染しているかどうかを測定します。荷物も全てを測定します。皆さん、やはり色々な思いがあり、持って帰ってきたものには、今まで育ててきた作物や苗などもありました。そういうものは、健康被害があるかもしれないのでやめておいた方が良いでしょうというお話をするのですが、どうしてもって話で、ちょっともめたりもしました。皆さん、少しずつ我慢していただいて、「しょうがないな」などと言いながら戻して行きました。測定して何が出るわけでもないのですが、やはりその後のことを考えると、やめておいた方が良いのかなと、最後は皆さん我慢されていました。

出発前に東京電力さんが説明をされるのですが、その時、罵倒というか、野次などが飛ぶのかと、少しどきどきしながら見ていましたが、その東京電力の職員さんもその住民であり、またここに来ている方々もその家族であり、住民であるということで、原発とか、放射線とか、いろいろ被害がありますが、皆が大変なのだということをすごく分かち合っていて、何もなくて淡々と流れて行くのがすごく印象的でした。

私は2日間、一時帰宅者の測定をしましたが、汚染をされていてそれを洗ったり、その服を捨てる必要がある人は1人もいなかったです。地域的に放射能レベルが低かったからかもしれません。

被ばくの恐れがないですよ、大丈夫ですよと案内すると、「安心しました」と言われましたが、その一方で、「じゃあ、なぜ家に帰れないのかな」と、そういう説明の矛盾というのを感じながら、安心していただくことに努めました。

放射線という、どこからどこまでが良くて、どこからどこまでが悪くて、この単位が何なのかとかいうのがすごく分かりづらい世界のことを、皆さん、分からないからこそ不安なのだと思いました。だからこそ、不安を取り除くために、安心できるように説明させていただきました。以上です。

## ———現地での給水活動———

### 上村（司会）：

ありがとうございました。続きまして、今回、広範囲に被害が広がり、ライフラインの壊滅的な状況が復旧をさらに遅らせています。現地で給水活動を行った水道局の工藤さん、現地の活動状況についてお話をください。

### 工藤：

水道局西部工事事務所の工藤です。水が直接手に入らないような所で、とにかく給水活動をしようということで行って来ました。

私の場合は、福島県のいわき市に給水車2台が既に行っているのので、いわき市水道局の方に話を聞きながら給水活動を行うように言われ、現地に向かいました。

まず、いわき市ですが、福島原発から一部の市域が30kmにかかるような所で、情報が本当に錯綜しており、「30kmにほとんどかからないから安全だ」という話もあれば、「少しでもかかればやはり危ない」という話もありました。何が正しいかというのは正直分かりません。行くにあたっては、放射線を測定する線量計を持って行きました。

いざ行ってみて、毎日、震度2～4の有感地震が昼か夜に1回は必ずあるような状態でしたので、怖い思いをちょっとしました。

いわき市のライフラインの被災状況ですが、浄水場で作った水道水を山の上の配水池までは送れるのですが、各配水池から各家庭に送る段階で、色々な所で漏水しており、その漏水修繕をしないことには各家庭には届かない。水は作れるけど家までは届かないという状態でした。

そこで私たちが給水車で配るわけです。水道局は給水車を2台所有しており、これが1回で1.5トン水を積みます。普通乗用車、普通免許で運転できる給水車ですが、私のほか職員3人が2人1組になり、2班で給水活動をしました。1日に5～6カ所。午前中に3カ所か午後3カ所というように配って行きました。

1人に配るのは20～30kgぐらいです。皆さん、ポリ容器とかポリタンクなどを持って来て、わっと並べられます。20～30分で1.5トンの水がなくなってしまうました。なくなったらまた泉浄水場に行きました。半径5km圏内ぐらいを動いていました。

することは簡単で、水をついで配るだけです。しかしながら、いわき市さんが並行して一生懸命壊れた配水管を修繕しており、その修繕完了の情報が我々に伝わらないため、指示された所に行っても、修繕完了後で既に水が出る状態になっていることもありました。

そのほか、100～200人があつという間に並ぶと1.5トンの水もすぐなくなってしまうます。なく



（工藤邦紀さん）



なった時にまだ水をもらえてない人が、40～50 人いたりすることもありました。そういう人たちには、「申し訳ありませんがなくなりました」とお断りします。当然、次にいつ来るのかという話になります。ですが順番があって、他の所に行かなければなりません。そこで、「申し訳ないですが、明日になります。」とはっきり言うようにしていましたが、皆さん、当然「どうして」ということを言われます。ただ、全員ではないですが、北九州市から来ているのを分かっている方は、遠い所からわざわざ来てもらっているのだから、「そういうことは言ってはいけませんよ」ということを言われる方もいらっしやって、気を使っていたいただいているのを感じました

### ——発災直後の釜石市の様子——



(三角順美さん)

#### 上村 (司会) :

続きまして、本市は釜石市を継続的に支援しています。そもそも釜石市への支援となったきっかけは、製鉄の町ということももちろんありますが、震災直後から、保健師さんが釜石に入っていたということもありました。震災直後の釜石市の様子なども含めてご紹介ください。

#### 三角 :

若松区役所保健福祉課の三角と申します。私は保健師として今回、釜石市に入りしました。

私たち保健師の派遣については、発災翌日に派遣の照会が厚労省から来て、13日に北九州市から派遣するということが決定されました。いくつか派遣候補地が厚生労働省から来ましたが、その中に釜石市があり、同じ製鉄のまちということで釜石に決まったと聞いております。

14日に北九州市を出ました。保健師は阪神や中越地震の時にも派遣してきましたけれど、こんなに早い時期に派遣を出したのは今回が初めてです。

たまたまですが、NHKの記者と一緒にということになり、14日に飛行機で秋田空港まで行き、秋田空港で初めて記者とお会いしました。15日にNHKの報道が手配したタクシーを使って、6時間かけて釜石に入りました。

まず、釜石合同庁舎に行きましたが、建物も何も異常がありませんでした。しかしながら、合同庁舎から車で10分ぐらい釜石港方面へ向かった所で風景が様変わりしました。地震で家がつぶれたところより、津波で根こそぎ町がとられている光景です。建物の骨格自体はしっかりしていますが、1階がとにかく根こそぎとられているという、そんな風景を見ました。私自身もこんな状況初めてでしたが、このような中で、釜石市民の皆さんがどのような生活をしているのかということが気がかりでした。

3カ所の避難所に参りましたが、すでに炊き出しをされており、コミュニティができていました。お寺が避難所になっていましたので、檀家さんのネットワークで食料を集めて、4カ所の避難所の炊



き出しを日に2回行い、とてもまとまりがしっかりしているところでした。

昼間、避難所の中に入ると、若い方や、家の片づけをしないといけない方は外に出ていましたので、残っているのは高齢者やちょっと病弱な方でした。

避難所の中では、そういった方の健康相談を受けながら、感染症の予防のために換気の必要性や、お掃除についてお話ししたり、1日1回、ラジオ体操でも何でもいいから体を動かすようにということをお願いしました。

15日に行ったときにはとにかく道路も何もかもひどかったのですが、次の日は、道路の両脇に流された車が縦列で並び、その日の夕方にはその車がなくなっていました。自衛隊の方や色々な業者の方が入られて整備され、17日にはメインストリートに、ある程度大型の車が入れるようになっていました。17日、私たちが釜石合同庁舎から出る時は、救助犬を連れたアメリカの救助隊が入って来ました。

保健師の派遣は現在も続いています。私は一番始めに入りましたが、6月ぐらいになると、仮設住宅へ皆さん移られ、刻々と健康課題も変わっていき、対応する内容も変わっていきました。

厚生労働省からの依頼は8月末で終了しましたが、その後も本市として保健師を引き続き派遣しており、派遣は来年度も継続する予定です。

いずれにしても、やはり、あれだけのことを見ると、やはり、何か一緒にやっていかないといけないのではないかと、そういう感じを持って帰ってまいりました。以上です。

## ——避難所での生活——

### 上村（司会）：

ありがとうございました。今回は多くの方が津波で家を失い、長期間に渡る避難所生活を余儀なくされました。避難所での支援活動などご紹介ください。

### 春日：

産業経済局緊急経済・雇用対策室の春日と申します。

私は、避難所の支援活動で現地に行っていました。

7月4日から約1週間、避難所運営の支援に行きましたが、私は第14隊ということで、ある程度、避難所の運営生活ができて、当初は5カ所あった本市が応援する避難所も、私たちの時は3カ所で、それまで14～15名だった隊員も、私の時は7～8名に減り、縮小傾向にある中、行かせていただきました。

私は、旧釜石第一中学校という7年前に廃校になった体育館を利用して避難所になっている所に行きました。廃校になるぐらいなので非常に古く、雨漏りがしたり、非常に環境のよろしくない所で、避難者の方は大変だなと思っていました。

約8割が高齢者の方で、夜は40～50人ぐらいいらっしゃいますが、昼は、仕事に行かれる方などがいるので20名程度でした。4カ月ぐらい、皆さん、住まわられていますので、コミュニケーションも



（春日伸一さん）

活発で、悪いという状況ではありませんでした。

テレビでは、避難所生活が長く続いているので、もめ事があったり、けんかも起きているという報道がありましたが、私が行った所は非常に皆さん仲良くしていました。ストレスも溜まるし、九州の人だったらこんな状況でけんかも起きるだろうなというところでも、東北の人は辛抱強いというか、非常に心がおおらかというか、とても仲良く生活をされていました。

施設の概要ですが、水道と電気はありましたが、ガスはほとんどなくて、カセットコンロで調理していました。トレイは仮設トイレを4基設置して、毎日きれいに清掃して使っていました。毎日清掃するので汚い、不衛生な感じではなかったです。ただ、報道でもありましたが、私が行ったのは非常に暑い時期で、釜石市では珍しく35度を超えるような日々がずっと続いており、匂いはそうでもなかったですが、ハエが多く、ハエ取り紙を設置し、ハエ取り紙1個に40～50匹とまっている紙もあり、非常に不衛生な感じがしました。慣れてないもので、トイレに入っていると、ハエ取り紙が頭にひっついたりしました。

避難所の中は暑いので扇風機を7～8台回していましたが、あまり効き目はありませんでした。冷風機が8機ありましたが、冷風機には50ℓの水が必要で、それが半日ももたずになくなってしまいました。この水を入れる作業は重労働でした。

避難所全体の運営に対しては釜石市の職員の方が1名いて、この釜石市の職員の方も実は家を流されて避難所から通っていました。他の避難所から通い、避難所で昼間は運営をして、夜、仕事をして、また避難所に戻るという職員もいらっしゃるということで、非常に大変だと感じました。

私が行ったときに、震度4の地震が1回あって、その他にも、震度3など頻繁にあり、津波警報が出ることもありました。たまたま、暑くて氷を買いに行くために車に乗っている時に津波警報がありました。車を降りて逃げないといけないのかなと思いましたが、他の車でも降りる気配がなかったので、そのまま車に乗って中学校に戻りました。震災当時も、まさかあのような大津波が来るとは、誰も思わず、車でどンドン避難していったのだらうと思いました。

### ———行政事務の支援・釜石市職員の様子———

#### 上村（司会）：

ありがとうございました。続いて、今回、被災地では庁舎や職員が被災したことで行政機能が大いに麻痺しました。本市からは税や市民課などの窓口にも職員を派遣しております。松下さんからは選挙事務の応援で接した釜石市の職員の様子なども含めてご紹介ください。

#### 松下：

小倉南区役所総務企画課選挙統計係の松下と申します。  
釜石市で行われた選挙事務の支援に行っていました。



（松下悦子さん）

釜石市では東日本大震災に伴い統一地方選挙が延期されていましたが、6月下旬、延期していた岩手県知事・県議会議員選挙および関係市町村議会議員の選挙が執行されることになり、釜石市から北九州市の選挙管理委員会に支援要請があり、私を含めて市選挙管理委員会及び各区の選挙管理委員会の職員が派遣されました。

私は8月21日から9月1日までの第1班で派遣されました。私達以外にも東京都の荒川区から選挙管の職員が1人、その後、9月に大阪市の職員が3人3班体制で現地入りするなど、本市だけでなく、他の自治体の職員の方とも机を並べてご支援させていただきました。

選挙を行うに当たって、釜石市の選挙管理委員会はいくつかの課題に直面していました。

まず、庁舎が被災したため、選挙機材、枚数計算機などが流失していたことです。

また、従来は40カ所の投票所を設けていましたが、そのうち11カ所が津波で流失したり、損壊していました。そのうち、別の施設を新たに投票所にするのが8カ所、別の施設がないため新たにプレハブを立てて投票所を設置するのが2カ所、投票所を統合したのが一箇所ありました。

さらに、選挙では、自宅に郵送された入場整理券を持って投票所に行きますが、入場整理券が果たして本当に市民の皆さんのお手元に届くのかどうかという懸念もありました。

通常選挙事務でさえ、迅速かつ正確に間違いがあってはならないので、大変神経を使いますが、それにプラスたくさんの対応を求められているにもかかわらず、釜石市の選挙管理委員会の職員の皆さんは冷静にきちんと業務を日々こなされていました。私がいた間も弱音を吐くことや、辛い姿をされていることは全くなく、その姿に、同じ行政職員として頭が下がる思いでした。

特に、今回、市民の方にどうやって選挙情報を伝えるかということを中心に大事にされていました。

入場整理券が本当に皆さんの手元に届くのかどうか。また、手元にハガキが届いたとしても、選挙当日、その住所が載っている投票所に行くことができるのかどうか懸念されます。実際は今、すごく離れた仮設住宅などに住んでいる方も多く、そういう方には期日前投票をお伝えするなどしました。

今回、釜石市では初めてのトリプル選挙ということもあり、本当に大変でしたが、私たちは、釜石市の選挙管理委員会の後方支援に徹することができ、選挙は無事執行されました。

## ———阪神大震災と今回の震災の違い———

### 上村（司会）：

ありがとうございました。それでは最後に、消防局の田中さんは、阪神淡路のときにも現地で活動されたと伺っています。今回は避難所運営の初期のころに行かれましたけれども、阪神のときと比べて、今回の違いなどについてご紹介ください。

### 田中：

消防局危機管理室危機管理課調整係長の田中と申します。避難所の第3隊の運営支援に行きました。平成7年の阪神大震災のときも、同じく避難所に常駐して神戸市職員の避難所運営の補助を行いま



(田中直樹さん)

した。

2つの地震において、避難所の日常の生活というのは似たようなものなのですが、今回の場合は、避難所毎に差もあったようです。地域の方たちがまとまって避難しているところと、様々な所から集まり運営体制がきちっとできていないところと、避難所によって大きく分かれるのです。

私は釜石観光センターというところを担当しました。そこは3つの避難所が1カ所に集約された直後で、避難

者がもともとのご近所さんでないため、まとまりがなく、自治組織がきちっとしてないような感じの避難所でした。平成7年の神戸のときは学校の周辺地域の人たちが集められた所で、日頃の町内会がそのまま学校に来ている感じのところだったので、運営組織が非常に対症的だったと思います。

今回、釜石市でも、釜石小学校などの自治組織がしっかりしている避難所では、運営の職員も、手出しを逆にしないほうが良いところがあったと思いますが、5月の3日から11日までの釜石観光センターは、こちらから何かしないと、自分たちは何もしないような雰囲気が漂っていたというのが、大きく違うと思いました。

それから、阪神大震災との違いという意味でいうと、今回は92%以上が津波による溺死だったということです。阪神のときはほとんどが家の倒壊や座屈などによる圧死が83%だったということです。当然、被災地の光景も、今回は津波に根こそぎ持っていかれているという状況でしたが、阪神の時にはつぶれた家があちこちに、燃えている家があちこちにあり、被災地そのものの光景がまったく異なっていました。

私が最も違いとして大きいと思ったのが物資についてです。阪神大震災や新潟の中越地震の時、日本中から支援の物資が集まりましたが、阪神の時には、特に着物や食べ物など、みんな送ってあげたいと思ったものを送りました。また、テレビで足りないものの報道がなされると、その品物だけがたくさん送られてきました。おむつが足りないという、おむつだけがたくさん集まったりして、かえって後で処理に困るなどの話をよく聞いていました。

その後、いろんな都市で、ロジスティクスと言いますが、物資の搬送の仕分けなどの訓練が進んでいることもあって、今回はテレビの報道等でも、企業から食べ物は食べ物、飲み物は飲み物、衣類は衣類、1つの種類のものが順序だてて送られているというところが過去の大きな災害に比べるとうまくいっていると思いました。

釜石市もそうでしたが、各地に配送センターのような1カ所に避難所に配るための仕組みができていたのではないのでしょうか。阪神大震災の際、余った支援物資の廃棄にかなりの費用がかかったという体験も生きていたのかなという印象を受けました。

行政の被害に関していいますと、阪神の時は、神戸市の第2庁舎の4階部分が座屈していました。今回は大槌町や陸前高田市のように、庁舎そのものが浸水想定区域内にあったり、消防庁舎が浸水想

定区域内にあつたりで、流されていました。津波によって全部、市役所や町役場そのものが流されているところがかかりありました。

特に、大槌町のように町長さんが亡くなると、その後の復興に非常に大きな影響があると改めて思いました。職員も流された自治体がたくさんありますけど、行政の職員が亡くなると復興が遅れるのだということを今回、特に痛感しました。私からは以上です。

## 全員でのディスカッション

### ——災害時の情報伝達について——

#### 上村（司会）：

ここからは全員でディスカッションしていきます。

まず、災害時の情報伝達についてです。被災地では津波に関する正確な情報が伝わらず、結果として多くの人命が失われたと言われています。実際に現地に赴かれ、情報伝達がどうだったのか、また、どうすべきだったのかなどについてお話しください。



（上村課長）

#### 中禮：

地元の消防職員の話によると、消防職員、消防団員が消防車で海岸付近に行って避難を呼びかけましたが、避難していただけない方もいたということを聞きました。また、一緒に避難を呼びかけた消防団員の中には、そのまま、車ごと津波に流されたという話も聞いています。



3月11日の2日前の3月9日の日にも前震とみられるマグニチュード7.2のかなり大きな地震がありました。この地震の時には、大きな揺れの割には、幸いにも大きな津波がなかったことから、2日後の東日本大震災の大きな揺れの時にも津波がないと判断して逃げなかった人が多かったそうです。

#### 伊藤：

災害時の情報伝達では、受信・送信を含めた指揮系統と情報収集の手順をどう決めておくかが重要です。阪神淡路大震災の時は、不確かな情報が数多く流され、被災情報の混乱から効果的な医療活動ができませんでした。その反省から、医療情報の伝達システムは最優先で整備されてきたと思います。

特に、災害急性期から活動する DMAT は、正確な被災地情報を入手する必要があり、情報伝達の整備が最も進んだ一つです。発災直後の 15 時には、私の携帯に厚労省から最初の指示が届きました。内容は、宮城県への出動準備指示でした。その後も DMAT 隊員ひとりひとりに、10 分おきにメールによる指示が入って来ました。また、広域災害情報システム (EMIS) のなかの DMAT 掲示板をみることで、どの場所で、どこの所属の DMAT チームが活動をしているか、移動中の道路の通行止めの箇所や交通渋滞情報などがリアルタイムに確認できます。

被災地内で使う情報伝達ツールは複数用意しておくことが重要です。八幡病院には衛星携帯電話が 2 機あります。携帯電話が繋がらない被災地域で衛星携帯電話が有用ですが、衛星携帯より通常の携帯が繋がりやすい時もあります。被災地域では、衛星携帯電話、一般の携帯電話、無線機や拡声器など、複数の情報伝達ツールを準備しておくことが重要です。

### 上村 (司会) :

今回、特に、原発、放射能の話でいうと、国からの情報が信用されていないという側面もかなりあったのではと思いますが、いかがでしょうか。

### 浅野 :

信用できるかできないかというのは、個人の知識の違いということも確かに大きいと思います。むやみに怖がっているところが、報道などを見るとやはり思いますし、でもどこまでが安全なのかというのなかなかその事例がありません。

どこを比較して、どう思うかというのはなかなか難しいものだと、この庁舎内においても、現場にいてもそれはとても思いました。シーベルト 1 つ、グレイ 1 つからして、皆さんの知識が徐々に高まっていく中、ちょっとずつ安心しているのではないかなとは、少しは思うのですが。

## ——心のケアについて——

### 上村 (司会) :

次に心のケアをテーマとさせていただきます。阪神淡路大震災のときには、仮設住宅に移り住んだ後、孤独死が多かったということもクローズアップされました。今回、心に傷を負った方もたくさんいる中で、心のケアがこれからも大事になってくると思います。その点、現地で活動した中で感じたことなどございましたらお願いします。



### 三角 :

地震などの災害はやはり失うものが多いですし、今回は津波ということで、私たちが行った時に、

家族が流されたという方や、お孫さんがまだ見つからないという方が避難所におられました。まだ、亡くなられたとか、いらっしゃらないことをご本人が語れる状況ではなかったもので、あまり無理やり聞き出すことはせずに、「待ちましょね」というかたちで対応しました。やはり、そういうショックな気持ちは、時間が経つにつれて出てくるので、対応する者がきちんと気をつけていかないといけないと思います。保健師の間では、活動支援においてメンタルケアをきちっとやっっていこうということを引き継いでいきました。

それからあともう1点、職員の方のメンタルケアが必要です。当時行った所では、被災直後に、たまたま「即、避難所に行って」と言われた職員さんが、その日からずっとそこに寝泊りしているというような状況でした。職員さんも被災者ですし、長期化するものなので、ローテーションの組み方というのも含めて対応していかないといけないと感じています。以上です。

#### **春日：**

避難所で旦那さんを亡くされた方がいらっしゃいました。すごく寂しくて、4カ月経ってもやはりそれを受け入れられないという状況で、精神的にも不安定になっていました。

7～8月頃のテレビでは、仮設住宅に移動しない人がいるとの報道がありました。それは食事の問題などいろいろ言われていましたけど、その人は、一人になりたくないということでした。一人になると自分がどうなるか分からないので怖くて一人になれない。だから最後までこの避難所にいたいということを切々と語っておられました。避難所で最後まで仲間と一緒にいれば少しでも自分の気持ちが癒されるということを話しておられました。

何と言うか、私に何ができる訳でもありませんが、お話をさせていただいて、少しでも気が楽になればという思いでした。

それからもう1人旦那さんを亡くされた方で、津波に流された時、流されてきた車の上に乗って、そのはずみで民家に飛び込んで助かったという、九死に一生を得て助かった方がいらっしゃいました。その方は、振り返ってみても何があったのかよく分からず、起きているときにも夢なのかどうなのかが分からず、今でもご主人が現れるのではないかとということ、まだ信じているようでした。

また、今までタバコを吸ったことがなかったが、タバコが急に欲しくなったという方もいました。精神的に不安定な状況がかなり進んだからではないかと、本人はおっしゃっていました。

自分たちは何ができるのか分かりませんが、避難所の中では無理にお話を聞こうとはせず、話していただければお話を聞くという感じで1週間過ごしてまいりました。以上です。

#### **伊藤：**

災害急性期では、援助する側と援助される側、両方の心のケアが必要です。心のケアで重要なことは、顔の見える関係を一定期間続けられることです。派遣医療チームであっても、1カ月ぐらい滞留して継続したケアを行わないと、開きかけた被災者の心はまた閉じてしまうでしょう。しかし現実的には、今回のように広範囲に被害がおよぶ大災害では、心のケア対策のためのマンパワーもたくさん

必要なため、スタッフの短期間の交替も仕方ないかもしれません。被災地外からの医療支援者は、できるだけ現地の医療従事者のサポート役に徹し、現地スタッフが長期間継続して活動できるように協力すべきです。

**上村（司会）：**

現地の方も少数でやられているみたいですからね。

**伊藤：**

今回は現地の行政に携わる人も多数亡くなっており、行政機能は完全に破壊されています。今回は特殊な事情でした。

**三角：**

そういったこともあり、来年度の本市の保健師は長期派遣するということで決まっています。

心のケアだけではなく、普段の保健活動も止まってしまっています。災害の時の緊急対応だけではなく、その部分もやはり支援することが今回のこの規模では必要だと思います。

保健師もここまで長い期間の派遣は今まで経験ありませんが、来年度も継続して支援していきます。

——地域コミュニティの重要性について——

**上村（司会）：**

次に、地域コミュニティについてお話ししたいと思います。震災を契機にして、家族の絆や地域コミュニティがクローズアップされています。ここでは地域コミュニティの重要性について議論していただきます。

**松下：**

私は選挙事務とは別に、6月にも避難所支援に行きました。被災者の皆さん、最初のころは、皆寄せ集めで、リーダーがいなかったのですが、釜石市の職員の方を中心に試行錯誤しながら、避難所生活のルールづくり、ごみ捨てや掃除当番から食事の当番も含めて、自分たちでより快適にするよう心がけられていたと思います。やはり、避難所生活が長くなるということは皆さんも分かっていたので、我慢しながら、お互いに快適な生活を送るための距離をとりながらだったと思います。年配の方に対し、若い世代の方が日頃から声をかけてあげるとか、そういうところが心がけていたと思います。

やはり災害時は市の職員がリーダーシップを取りながら、上手く調整して、自主防災組織など今後必要だとは思いますが、そうではない場合も想定して、そうではない場合は誰がどこでリーダーシップをとっていくのかなどを考える意味でも、良い経験させていただきました。



今後もやはりネットワークづくりが重要ですね。

**田中：**

避難所ごとに、災害の形態や避難所の構成メンバーでたぶん変わると思います。そういう意味では、避難所の中心人物になる人が変わる可能性もあるし、日ごろのコミュニティや地域の連携づくりが大事なのはいうまでもありません。行政から見た時には、うまくいっている避難所はなるべく自立できるようにかたちで運営されることが望ましいし、できていないところには行政のサポートがある程度必要だと思います。そこは避難所によって大きく違うと思います。いろいろな避難所を私も見せてもらいましたが、大きくスタイルが違ってきます。

そういう意味では今回行かせてもらったのが、非常に勉強になったと思います。日頃の地域づくりが大事だというのは私も松下さんと同じ意見です。

**春日：**

やはり避難所を出たくないという方がいらっしゃる背景には、一人になりたくない、どこかつながりを持っておきたいということがあります。地域コミュニティの大切さっていうのはやはり今回のことで盛んに叫ばれています。北九州もいろいろ地域コミュニティとの連携について取り組んでいますけど、やはりどこかに限界があったりします。その限界をどう突破していくのかというところが、ここの最大の課題にはなってくると思います。



無理に、地域という枠にはめる必要もないと個人的には思います。例えば、その人がゲートボールを好きだったらゲートボールのつながりを、それは他の町内でも良いからつながりを持っておくということが良いと思います。色々などこかでのつながりを持っているというのが大事だと思います。孤立しないやり方、一人じゃないっていう仕組みができればいいと思いますが、なかなかそこは、今からすぐに作るのは難しいとは思いますが。市役所の人間として皆が考えていかなければならないと思います。

**伊藤：**

いま私は、「北九州モデル」という広域災害時の医療救護システムに取り組んでいます。北九州地域で災害が起きたとき、八幡病院の災害医療研修センターと医師会、歯科医師会、薬剤師会が協力して、発災直後の後方支援を行うためのシステムです。具体的には、診療所の先生と薬剤師さんが一緒に避難所を回る、歯科医師の先生が避難所で口腔ケアを行うようなことを考えています。いま困っているのは、北九州モデルへの市民の参加です。市民と一緒にやる支援の旗振り役、そういうコミュニティを扱っている窓口がどこなのか分からないことです。保健福祉局とか、区役所とか、色々なとこ

ろに声掛けをして、私たちと連携できる市民団体の推薦をお願いしていますが、進んでいません。そこは絶対に進めないといけないと思っています。

**高原：**

伊藤先生がおっしゃられていること、すごく重要なことだと思います。

今言われた窓口は、一義的には自治会だと思いますが、自治会、町内会の組織率が非常に悪くなっていることや、高齢化が進んでいることなどを踏まえ、実際にそういう場面に遭遇したときに本当に機能するのかということがありますよね。

そこでやはり、NPO やボランティア組織などがどこまで成熟してきているのかということもあると思います。そこに役所の機能、公務員の役割がどこまで果たせるのか。普段の業務以上にどこまでできるのかというのがあります。それはすごく大きな課題だと思います。今取り組まないといけないと思います。

———危機管理・行政の対応について———

**上村（司会）：**

最後のテーマです。危機管理、行政の対応についてということでございまして、今回の震災では釜石の奇跡がそうであるように、防災意識の高いところは助かって、そうではなかったところは残念な結果に終わったということも言われています。実際、被災地で活動して感じたことや、本市の防災についての教訓などについて、田中さんいかがでしょうか。

**田中：**

まず、最近、宮城県南三陸町の危機管理課の若い女性職員が防災無線で最後まで避難を呼びかけ、津波が到達する直前まで呼びかけ続けて、流されて亡くなったという話がよく報道されていますが、美化された取り上げられ方にすごく疑問を感じます。

逆に、安全管理上の問題があったのではないかという部分をきちっとクローズアップしないといけないのではないかと思います。適切な時期に職員を避難させるという、幹部、指揮官の指示は非常に大きな責任だと思います。

**中禮：**

消防の立場から言うと、災害現場活動において人命救助を優先した活動となりますが、活動する上で一番大切なことは活動隊員の安全管理です。隊員も含め活動する隊が安全管理を徹底し、任務を遂行しなければなりません。その判断は、過去の活動での経験則であったり、現場状況（状態）を判断しながらの活動となります。

**伊藤：**

災害現場の医療救護活動では、まず自分の安全を最優先に考えて頂きます。医療従事者が負傷すれば、多くの負傷者治療に影響します。自分を犠牲にしても支援しようという考えの人は、医療チーム全体を危険にさらしてしまう可能性があり、災害現場活動には向いていません。派遣チームのメンバーは被災現場の地理に不慣れであり、危険箇所の確認も容易ではありません。私たち医療チームの安全は、現場を指揮している消防機関の隊長に委ねます。現場で活動に入る前に、医療本部の責任者は、安全な活動場所、危険な活動場所を現地合同本部から情報収集し、展開する医療チームメンバーに伝達します。現場指揮者の指示に従うことが、すなわちチームの安全、自分自身の安全に繋がります。逆に、安全の判断を間違った場合でも、チームはその指示に従うため、指揮官は繰り返し安全を確認することが重要です。

災害現場の危機管理とは、活動する救護者の安全確保と統率のとれた現場指揮系統だと思います。今回の震災では、消防や警察のかたも多数亡くなりました。今回は想定外で、通常の危機管理が通用しなかったという意見がありますが、阪神淡路大震災のときも、同じような意見ができました。各機関、各部署において危機管理の不備を反省し、検証し、今度こそしっかりした体制作りが望まれます。

前は地震災害を経験し、今回は津波災害と原発事故を経験しました。これで次の災害時にうまくいかないことがあれば、日本は本当に駄目でしょうね。

**上村（司会）：**

なかなか難しい問題ですね。経験がないとそういう判断もできないですね。

**伊藤：**

しかし経験しないとやはり、ステップアップしていかないですよ。

**工藤：**

私は阪神淡路大震災が起きる前まで橋を作る会社で勤務していました。土木構造物はどんな地震がきても基本的には壊れない設計をずっとやってきました。ところが、あの阪神淡路大震災で、自分が架けた橋はどんな地震が起きても壊れないと思っていましたが、実際にはやはり壊れていました。そのときに、土木構造物というのは、すごい災害がきても壊れないように基本的には作りますが、やはり壊れる。どういうことでもそうですが、絶対なんてありません。それ以上のものをつくるという考えもありますが、そうではなく、撤退することや、それ以上、先には行かないなど、色々な考え方があると思います。それがやはり重要だなと。

**上村（司会）：**

まさに原発事故がそうですよね。安全というところで思考が止まっていたので、それ以上の対策が

とれていなかった。

**松下：**

行政の力は本当に人だということが一番感じました。釜石市職員の方も選挙管理委員会の職員の方もそうだったのですが、これだけ大変な中で事務をしなければならなくても、常に市民の目線を忘れずに、業務に臨んでいました。

そして今回、他の自治体からたくさんの支援が来て、これで本来業務に専念できるということが、釜石市職員の力の源になっていたというのは実感しました。職員同士のネットワーク、人の力もそうですし、自治体の垣根をこえた人の力というのをすごく感じました。

**上村（司会）：**

あらかじめ設定していたテーマは以上です。この他に言っておきたいことがあればどうぞ。

**松下：**

避難所支援は7日間でしたが、24時間、市民の方と寝食をともにさせていただきました。私は事務職ですので、心のケアや医療的な知識は全くない中で、本当に飛び込んだ状態でした。寝食をともにすれば、たった何日間でも家族のように皆さんが接してくださり、3月11日に何があったのかという深い話を聞く機会が何度もありました。

しかしながら、その時に、どのような心構えでお話を聞けばいいのか、それをどうやって受け止めたらいいのか、そういう訓練を私は受けていませんでした。

日本は地震も多い国ですし、また同じように支援に行くことがあると思います。そのときに市職員誰もがそのような状況で支援に入ったとしても、自分を保てる基本的な知識を持つことができるような機会を常日頃から提供していただければ、いざという時、役に立つのかなと思いました。

**上村（司会）：**

ご指摘の点は、私たち事務局の事前の準備やケアが至らなかった部分もあったかと思います。

最後に高原から講評いたします。

**高原：**

長時間に渡って座談会にご参加いただきありがとうございます。今日は本当に貴重な情報やご意見をいただきました。

明治29年の明治三陸大津波でも2万人以上が犠牲になっていますが、さらにこの37年後の昭和8年に昭和三陸地震津波がありました。この昭和三陸の直後、物理学者で随筆家の寺田寅彦が書いている「津波と人間」という文章の中で「歴史上、同じような災害が繰り返し起こっている中、被害を最小限にするには人間が過去の記録を忘れないように努力する他はない」と言っています。

今日の座談会は、今後の支援の際の参考と、それから本市での災害対応に役立てさせていただきたいと思います。

皆さんそれぞれのお立場で貴重な経験をされています。日ごろの業務の中でその経験を活かしていただくとともに、また、同僚の方や他の職員にも折に触れて伝えていただければと思います。

忘れないことが一番だろうと思います。

本日はありがとうございました。

座談会収録日：平成 24 年 2 月 27 日

会場：本庁舎 5 階「特別会議室 A」